

1982年9月：軽井沢、前期阿部ゼミ合宿



1985年3月：一橋大学卒業式



1984年6月：尾瀬

阿部先生に出会ってしまった！
それが私を研究者にし、
北欧史研究にのめり込ませた。

2006年9月4日、

元一橋大学学長の阿部謹也名誉教授がお亡くなりになった。

中世ヨーロッパ史の碩学として知られた阿部先生は、

一橋大学学長を2期6年、

国立大学協会会長を1年お務めになり、

大学改革にも貢献された。

ゼミ生だった阪西紀子助教授の研究室を訪問、

阿部先生を偲んでいろいろ語っていただいた。

厳しいゼミ！の噂を吹っ飛ばす 魅力的な歴史を見る視点

高校時代は日本史と地理を選択して、世界史は履修しませんでしたし、阿部先生がいらっしゃるから一橋大学に入学したというわけでもありませんでした。むしろ、父が商学部の出身でゼミナールや学部間の垣根の低さなどの話を聞いていたので、なんとなく良さそうだと思い、受験する気になったのです。当時私は、文学部を非常に狭く考えていましたから、社会学部なら自分がやりたいことをやれそうだったのです。

阿部先生のゼミについては「大変だ」という噂がありました。実際、テキストはドイツ語かフランス語で、それを毎週精読していたので、大変だといえば確かに大変でした。しかし、こんな噂を吹き飛ばすぐらい阿部先生の授業には惹かれるものがあったのです。単なる事件史や政治史というのではなく、ごく普通の人々が何を考えていたのかという、先生の視点を興味深く感じました。「歴史学ではこういうことを問題にしろんだ」と、3年生になったときには迷わず阿部先生のゼミを選びました。

当時、フランスのアナール学派という歴史学の大きな流れが日本にも紹介されつつありました。事件中心の旧来の歴史認識とは異なり、関連学問の発想や手法を応用することで、個々の事象を超えた歴史の全体的把握を進めていこうという考え方です。阿部先生は、自説へのアナール学派の影響を指摘されると、即座に否定されていました。全く独自で別な発想から生まれたものかもしれませんが、世界的に歴史に対する視点が変わってきた時期ではありました。

ゼミの締めは 白十字でのおしゃべり

阿部先生は、「現在の社会に完全に適応できている人間には歴史学を勉強する必要などありません。適応できなくて疑問を感じて

いる人間がやるものです」とおっしゃっていました。現在とは異なる可能性を提示するものであるということになるでしょうか。

ゼミテンは副ゼミ、学長期の前期ゼミも合わせて通算で130名ぐらいです。ゼミでの先生は非常に早口で、頭の回転が速い上に気が短かいので、思いつくとパッとしゃべります。このパッと聞かれたことに、パッと答えることを求められている感じがあって、即問即答が苦手な学生は困っていました。とって緊張感がみなぎっていたというわけではありません。毎回研究室でコーヒーを淹れてゼミを始め、ゼミが終わると白十字（喫茶店）でおしゃべりです。お忙しい中をよく学生にお付き合いいただきました。

阿部先生は研究に対しては非常に真摯でした。「我慢してやるのは禁欲ではありません。やりたいことに没頭するあまりほかのことをやりたいと思わない状態が禁欲です」という言葉そのままです。

ところがある学生の卒論報告の日に、研究室のドアに「都合により本日休講」の張り紙がありました。後で知ったのですが、ある芝居の千秋楽のチケットが手に入ったのだそうです。普段のイメージとは違う人間くさい行動だったので、印象に残っています。

1年に1回はお宅に伺いました。ゼミテンの動静を家でよく話していらっしやるようで、奥様や2人の息

子さんたち——1人は現在経済研究所助教授である修人さん——もゼミのことをよく知っていらっしやいました。

当時の男性たちへのいらだちが 研究者への道を後押し

私が研究者の道へ進んだのは、当初から考えてのことではありませんでした。学部2年生くらいまでは、公務員や企業への就職という選択肢も考えていたのです。ただ、大学院進学を決めるにあたっては、「院に行ったら研究者」ということは漠然と思っていました。

一つには、当時の一橋大学の男性たちが女性の立場に対する理解が薄いことへのいらだちがありました。会社に入っても、うんと上ならまだしも、同期がこれか、と思ったら暗くなり、どうせ



1984年6月：尾瀬

苦勞するなら好きなことをやろうと考えたのです。その好きなことが研究だったわけです。

また、私が小平祭の実行委員をやっていたときの同期にバイタリティあふれる女性がいました。きっとこういう人がバリバリのキャリアウーマンになるのだろう、私はこういうことではこの人にはかなわないと思ってしまいました。これも一橋大学にいたからこそ、こうした見切り方ができたのでしょうか。

キリスト教化が遅れた 辺境の北欧こそ面白い

阿部先生とは、研究地域が違ったためか、修士課程に入ってから「僕のところにいてもどうしようもありませんから、さっさと留学しなさい」と言われ続けました。こうしてデンマークに留学することになりました。

日本は明治以降に急速に近代化を果たしました。それはヨーロッパの上澄みだけを取り入れていて、根っこのところは違ったまま来ています。だから現在、いろいろな形でひずみが生まれているのです。そのもともととのところの違いは何なのかを、研究したかったのです。普遍としてのヨーロッパではなく、「何でこうなのだ？」と疑問を感じるヨーロッパを、です。なかでも北欧諸国はヨーロッパの辺境であり、小国です。明治初期の日本には小国として北欧を目標にしたらどうかという発想もありました。アイスランドに関心を持ったのは、キリスト教化が遅れたこともあって古い宗教や慣習が遅くまで残り続けたところが面白いと思ったからです。

阿部先生に出会うことがなければ、ヨーロッパ史を学ぶこともなかったし、研究者になることもなかったでしょう。私は、阿部先生に出会ってしまったのです。(談)



社会学研究科助教授

阪西紀子 Noriko Banzai

主要研究領域：ヨーロッパ中世社会史、北欧地域研究、アイスランド・サガ研究。1985年一橋大学社会学部卒業、1987年一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了、1987年～89年デンマーク政府奨学金によりコペンハーゲン大学へ留学、1993年一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。1997年より現職。



2006年10月29日兼松講堂：故阿部謹也先生との「お別れの会」

阿部謹也 (あべ・きんや)

1958年一橋大学経済学士、1960年一橋大学社会学修士、1963年一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。

1964年小樽商科大学講師を皮切りに同大学助教授、同大学教授、東京経済大学教授を経て、1979年一橋大学社会学部教授、1987年一橋大学社会学部長、1992年～98年一橋大学学長。1996年国立大学協会会長。

主な著作は、『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』（平凡社）、『中世を旅する人びと——ヨーロッパ庶民生活点描』（平凡社）、『阿部謹也自伝』（新潮社）、『阿部謹也著作集 全10巻』（筑摩書房）など多数。